

# 連載コラム



## 第42回 花壇の花(3) ～セキチク、シャガなど～



もとよし ふさお  
本吉 総男

2018年5月

第 41 回「[花壇の花\(2\)](#)」では早春から春たけなわの季節までの花を紹介しました。季節は早くも晩春から初夏に移ります。しかしこの季節も花いっぱい、特に近年は国外から移入された花が多く見られ、みずき野の花壇を彩っています。なお、前回紹介しなかった4月に咲く花も若干加えています。

## 1 キク科の花たち：

デモルフォセカ、ガザニア、ガーベラ、イトバハルシャギク、ブルーデージー

キク科の花はひとつの花に見えますが、全体を頭花とうかといい、多数の花の集まりです。頭花とうかの周辺の花弁に見えるものは舌状花ぜつじょうかといい、頭花とうかの中央にぎっしり詰まった管状のものもひとつひとつが花で、管状花かんじょうかまたは筒状花とうじょうかといいます。詳しくは[第 3 回「タンポポと類似の野草たち」](#)を参照してください。

デモルフォセカという名で栽培されているものにデモルフォセカ・シニューータ(アフリカハウセンカ)およびデモルフォセカ・プルビアリスの2種があります。いずれも南アフリカ原産です。両種とも、品種改良によっていろいろな花色のものが作られています



デモルフォセカ 4月下旬 みずき野集会所西側花壇

が、本来の色はデモルフォセカ・シニューータは黄色、デモルフォセカ・プルビアリスは白色です。写真のものはデモルフォセカ・プルビアリスに由来する品種と想像しています。

なお、みずき野の花壇では見たことがありませんが、よく栽培される植物にオステオスペルマムがあり、花はデモルフォセカとそっくりです。ただし、オステオスペルマムの葉の方が幅が広いので識別できます。デモルフォセカは1年草ですが、オステオスペルマムは多年草です。

ガザニアの仲間はいずれも南アフリカ原産で、園芸上ガザニアと一般に呼ばれている植物は、ガザニア・リゲンスという種から改良されたものが多いようです。本来は多年草ですが、園芸上は1年草として扱われます。デモルフォセカと似た花をつけますが、舌状花はもっと幅が広く、基部(付け根付近)には黒い斑点または複雑な模様があります。



ガザニア 5月上旬 中央広場花壇

ガーベラの仲間もまた南アフリカ原産です。園芸に利用されているのはガーベラ・ヤメソニーという種から改良されたもので、多年草です。花壇にも植えられていますが、大量に栽培して切り花として売られることの多い植物です。



ガーベラ 5月上旬 中央広場花壇

イトバハルシャギクは北米東部原産の多年草です。細い葉が特徴で、黄色い花をたくさん咲かせます。悪名高いオオキンケイギク(環境省によって特定外来生物に指定され、駆除対象になっている)や草地を覆いつくすハルシャギクを含むコレオプシスの仲間ですが、それらに比べると丈も低く、華奢な感じきゃしゃです。しかし、見かけによらずたくましい植物なので、ひょっとすると将来野生化する可能性もあるように思います。



イトバハルシャギク 6月上旬 第2調整池花壇

ブルーデージーは、南アフリカ原産の多年草ですが、園芸上は1年草として扱われるのが普通のようにです。別名はブルーマーガレット。いずれも英語で使われている名

ブルーデージー 4月中旬  
みずき野集会所西側花壇

がそのまま日本でも使われています。さほど大きくはなりませんが、初夏の青空の色を写し取ったような青く美しい舌状花<sup>ぜっじょうか</sup>によって、花壇でも目を引く植物です。

## 2 オルラヤとイベリス

一般にオルラヤ(またはオルレア)と呼ばれている植物は、ヨーロッパ原産のセリ科植物で、学名はオルラヤ・グランディフローラといいます。ホワイトレースとも呼ばれていますが、英語のホワイトレースフラワーに由来します。花は確かに白いレース編みのように見えます。



オルラヤ 5月上旬 文化財公園石垣下

イベリスの原産地は地中海沿岸地方です。花壇で栽培されるイベリスには数種ありますが、いずれも園芸上、キャンディータフトとも呼ばれています。みずき野の花壇でよく見かけるのは、イベリス・センパービレンスという種に由来する栽培品種で、上記のオルラヤに一见似た白い花をつけます。しかし、オルラヤより花は小さく、多数の花が群がって咲きます。似ているように見えても、オルラヤはセリ科、イベリスはアブラナ科ですから、両種の間に関係はありません。



イベリス 4月下旬 文化財公園石垣下

## 3 ナデシコ科3種：スイセンノウ、アグロステンマ、セキチク

スイセンノウはセンノウ(リクニス)の仲間で、原産地はヨーロッパ南東部。茎や葉が白い絨毛<sup>じゅうもう</sup>に覆われ、フランネルの布地を連想させることから、フランネルソウとも呼ばれています。花は赤いものが多いのですが、純白、ピンク、白地にピンクの模様が入ったものもあります。多年草ですが、種子からもよく育つので、園芸上は越年草として扱うことが多いようです。



スイセンノウ 6月上旬 中央広場花壇

アグロステンマの仲間は地中海沿岸地方に原産する越年草で、栽培に利用されているのはアグロステンマ・ギサゴという種に由来する栽培品種です。茎の高さは1メートルに達し、大型の園芸植物ですが、花が豊富につき、美しい植物です。ヨーロッパでは原産地から生育地を広げ、コムギなどの穀物の畑の



アグロステンマ 5月下旬 第2調整池花壇

雑草になっています。英語名はコーンコックルといい、コーンは穀物の意ですがコックルだけでもアグロステンマを意味するようです。日本では別名ムギナデシコといいますが、英語名のコーンコックルに由来すると思われる。

セキチクは中国原産のナデシコ科の多年草で、ナデシコやカーネーションとともにダイアンサスの仲間です。ナデシコには数種類ありますが普通ナデシコと呼ばれている植物は植物学ではカワラナデシコ、文学では大和撫子やまとなでしことも呼び、日本美人のたとえにも使われます。



セキチク 5月上旬 第1調整池花壇



参考:

カワラナデシコ 5月中旬 神代植物公園

ナデシコは古くは別名で常夏とこなつと呼ばれていたということが通説になっています。古今集には次の歌があります。

とこなつ  
となりより常夏の花をこひにおこせたりければ、をしみて、  
この歌をよみてつかはしける

ちりをだに すゑじとぞ思ふ 咲きしより  
いもとわがぬる とこなつのはな

おおしこうちのみつね  
凡河内躬恒 古今集 (167)

(隣の家から撫子なでしこの花を分けて欲しいとやってきたけれど、惜しく思っ、この歌を詠んで送った。この花に塵もおくまいと大事に育てた花です。咲きはじめてたときから、いとしい妻と床をともにするという意味をもつ大切な常夏とこなつの花なのですから)

源氏物語では「帚木ははきぎ」の巻の中で、光源氏の友人、頭中将どうのちゆうじょうが次のような歌を詠んでいます。上記の歌に基づいて歌ったものです。

咲きまじる 花はいづれと わかねども  
とこなつ  
なほ常夏とこなつに しくものぞなき

源氏物語 「帚木」

頭中将どうのちゆうじょうのいう常夏とこなつは一人の女性を指しているもので、のちに光源氏が訪ねる女性「夕顔」のことです。

前述のようにナデシコ(カワラナデシコ)は在来種ですが、セキチクは平安時代に中国から日本に伝わり、盛んに栽培されるようになった植物です。平安時代には、ナデシコとこなつを常夏とも呼んでいましたが、セキチクとこなつのこともまた常夏と呼んでいたそうです(週刊朝日百科『世界の植物』76巻)。したがって、この頃の歌人たちはナデシコとセキチクを区別しなかったのではないかと私自身は想像しています。

セキチクは江戸時代に改良が進められ、「常夏とこなつ」という名は品種名として受け継がれています。みずき野の花壇に見られるセキチクも「常夏とこなつ」という品種に由来するものと思われます。

## 4 ヒエンソウ

ヒエンソウと呼ばれる園芸種に、地中海沿岸を原産地とするヒエンソウ(コンソリーダ・アヤシス)と中国原産のオオバナヒエンソウ(デルフィニウム・グラディフローラム)があります。右の写真のものは前者で、別名チドリソウとも呼ばれています。

ヒエンソウは漢字で「飛燕草」と書き、また別名のチドリソウは「千鳥草」。英語ではラークスパーク。ラークはヒバリのこと、スパークは尖ったものを意味する語で、鳥の<sup>けづめ</sup>蹴爪などの意味もありますが、正確にはわかりません。

なお、花では<sup>きよ</sup>距のことを英語でスパークといいます。

距とは花のうしろの突き出た部分のことで、花の一部です。ヒエンソウの花は<sup>きよ</sup>距が長く、そのため鳥が飛んでいるように見えるのです。多くの場合、<sup>きよ</sup>距は蜜を分泌し、ためる場所とされており、ヒエンソウの<sup>きよ</sup>距もそのような役割をもつと推測されます。

ヒエンソウは他のキンポウゲ科の多くの植物と同様に毒草です。何かと間違えて食べないように注意が必要です。



ヒエンソウ 5月下旬 第1調整池花壇

## 5 オオツルボ、ツリガネズイセン、スノーフレーク、シャガ

オオツルボの学名はシラー・ペルビアナムといい、ペルー原産のように誤解されがちですが、実は地中海沿岸が原産地で、キジカクシ科の多年草です。在来の野生種ツルボに近縁なのでオオツルボといいます。外観はツルボとはかなり違います。



オオツルボ 5月上旬 中央広場花壇



参考：  
ツルボ 9月上旬 3丁目東隣接地

ツリガネズイセンはイベリア半島に原産するキジカクシ科の多年草です。オオツルボと比較的近い種ですが、外観はかなり異なっています。

スノーフレークはアジア西部およびヨーロッパに原産するヒガンバナ科の多年草です。なんとなくスズランやスイセンに似ているのでスズランズイセンとも呼ばれますが、スズランはキジカクシ科なので類縁関係はありません。スイセンはヒガンバナ科の植物なので、多少の類縁関係はあります。



ツリガネズイセン 4月下旬 中央広場花壇  
(下のピンクの花はイモカタバミ)



スノーフレーク 4月下旬 中央広場花壇

シャガはアヤメ科の多年草です。シャガは山野に野生する植物ですが、その清楚な美しさから園芸植物としても庭園に植えられています。日陰を好む植物で、草(草本)なのに冬でも葉が枯れないという特徴があります。

シャガは在来種と思われがちですが、古い時代に原産地の中国から入ってきたものと考えられています。漢字では「<sup>しゃが</sup>著莪」と書き、この字は俳句によく使われます。学名はイリス・ヤポニカ、つまり「日本のアイリス」です。ちょっと嬉しい学名です。命名者は江戸時代、1775年8月から1776年11月まで日本に滞在した医者で植



シャガ 4月下旬 中央広場花壇



物学者のカール・ペーター・ツンベルグです。ツンベルグは近代植物学の始祖であるカール・フォン・リンネの弟子です。ツンベルグはリンネと同じくスウェーデン人なので、名をチュンベリーと書くほうが正しいかもしれませんが、ツンベルグという名で呼ばれることが多いので、ここではツンベルグとしておきます。

ツンベルグはわずか1年余り日本に滞在しただけでしたが、長崎付近で採集した植物や、のちに江戸まで旅をした際に東海道の各地、特に箱根で数多くの植物を採集しています。江戸時代には本草学者(薬効を調べることを目的として、植物、動物、鉱物などを研究する学者)が植物の研究を行っていましたが、本格的な植物学を日本の若い研究者たちに伝えたこと、また多くの日本の植物に学名を与えたことで、日本の植物研究史に大きな足跡を残した人物です。